

スマイル

318 SMILE

星

Azumi

Hoshi

杏美さん

(小野)

「下郷町は人が温かく、落ち着く環境です」と話す杏美さんは、昨年4月から町役場産業課の臨時職員として働いています。

高校卒業後、1年間県外の専門学校に通学。今年度より社会人1年目の生活を送っています。「学ぶことが多く、言葉づかひや様々なことが勉強になります」と話します。

高校では演劇部に所属。発表会や全国大会を目指し、仲間と共に練習に励んできました。

演劇をとおして成長した部分があります。それは、自分を表現することができるようになったこと。人見知りで自分を思うように出せませんでした。少しずつ自分を表に出せるようになりました。

また、将来的に地域の仲間と演劇グループを結成し、活動してみたいと抱負も語ってくれました。

趣味は舞台の観劇で、関東まで観覧に行くこともあるそうです。

20歳を迎え、「自分で考え、行動に責任を持った大人になりたい」と熱意をもって話す杏美さんでした。



自分で考え行動に
責任を持つ大人に

下郷町の むかしばなし Vol.9

『瓜姫』

ざっとむかしあったと。
爺さまと婆さまといたと。
爺さまは山にカノ焼きに行き、婆さまは留守居していたと。
そしたら毎日家の中にツバメが飛んできては糞を落とすといいたと。ある日婆さまその糞をかたづけると白い瓜の種子が1つあったので、喜んで裏の畑にまいたと。
瓜はだんだん大きくなり、ある日、食べようと割って見ると、中からめんげい女の子が出てきたと。
瓜から出たので瓜姫と名前をつけたと。瓜姫はよい娘になって、はた織から田仕事まで、なんでもできるようになり、村中の評判になったと。
ある日爺さまと婆さまは、「留守になっから戸を閉めてだれがきても戸を開けてはならぬぞ」と言って瓜姫を一人置いて山に行ったと。
瓜姫がはた織しながら留守居をしていると、ドンドンと戸を叩いて「瓜姫戸を開けろ」とどなる声がしたと。瓜姫は「開けられぬ」と答えたが「指一本ほどでよいから開けろ」と言われたので、少し戸を開けると、アマンジャクが入ってきて瓜姫をつかまえて食べてしまったと。
アマンジャクは瓜姫に化け、はた織りをしているふりをしながら、爺さまと婆さまを待っていたと。2人は、山から戻ると一生懸命はた織りをしてる瓜姫に「なにもなかったか」と聞いたら、パタンパタンと答えたので安心したと。
村では瓜姫を嫁に欲しい者が大勢出てきて、そのうちの1人に嫁にされることになったと。その祝言の日、瓜姫が迎え駕籠に乗ると鶯が、瓜姫

日曜当番医 (変更になる場合がありますので、ご了承ください)			
月日	医 院 名	電話番号	
3月	6日 伊南小野木クリニック (南会津町)	76 - 7780	
	13日 舘岩愛輝診療所 (南会津町)	78 - 8688	
	20日 耳鼻咽喉科あべクリニック (南会津町)	62 - 8733	
	27日 きむらクリニック (南会津町)	62 - 5576	
4月	3日 佐藤 医 院 (下郷町)	67 - 2134	
	10日 高橋 医 院 (南会津町)	62 - 0040	
	17日 芳賀 医 院 (下郷町)	67 - 2128	
	24日 長谷川 医 院 (南会津町)	67 - 0032	

の駕籠にアマンジャクが乗ったホーホケキョって鳴いたと。これは大変と思って降して見たらやっぱりアマンジャクだったと。それで、萱の中に投げてやったら萱に刺さって血がふき出したと。
萱株の赤いのはアマンジャクが投げられたときの血がついているからだというのだ。

(下郷町史 第五巻
民俗編 昔話より)

下郷町史
第五巻
民俗編